

<査読付論文>

銀座の台湾喫茶店 ——日常に滲み出た博覧会——

樺島 彩波

はじめに

本稿の目的は、1905 年からおよそ 25 年間にわたって銀座にあった「台湾喫茶店」に着目することにより、植民地「台湾」がどのように宗主国内（以降「内地」とする）の一般民衆に伝えられ、溶け込んでいったのかを考察することである。

台湾総督府は近年あらゆる機会を利用し「台湾」と云うものを内地に紹介することに努めているがそれにもまして台湾を民衆的に内地人に紹介し宣伝する役を勤めているのは東京銀座に店を営んでいる台湾喫茶店である⁽¹⁾（『大阪朝日新聞』台湾版、1922.12.6）

これは、1922 年 12 月 6 日の大阪朝日新聞に掲載された「銀座の烏龍茶（上）台湾の民主的宣伝者」という記事の文頭に書かれた一節である。銀座の一喫茶店が、台湾総督府（以下「総督府」とする）よりも、「台湾」を日本に伝えていたと評価されるのは非常に興味深い。「東京銀座に店を営んでいる台湾喫茶店（以下「銀座の台湾喫茶店」とする）」とは一体どのような店であったのだろうか⁽²⁾。

銀座の台湾喫茶店は、従来、カフェ文化研究の中で取り上げられてきた。野口孝一や林哲夫は通史的にカフェを研究し、銀座の台湾喫茶店についても当時の文人等の記述を集成してその実態に迫っている（野口 2018, 林 2020）。また、小関孝子は、飲食業における接客スタイルの変遷という観点から、女給を初めておいた店としての銀座の台湾喫茶店に注目している（小関 2021）。斎藤光は、ジャンル「カフェ」の成立と普及について考察し、銀座の台湾喫茶店については、カフェジャンルに入るかの解釈が当時から揺れていると指摘している（斎藤 2011）。いずれにしても、これまでの研究では「カフェ」あるいは「女給をおいた喫茶店」という一面についてのみ焦点が当てられ、台湾との関係性が取り上げられることはなかった。

台湾は、日本が 1894 年の日清戦争の勝利によって初めて獲得した植民地である。植民地台湾と宗主国日本の関係については、多方面からの研究があるが、内地の一般民衆の植民地理解については、あまり研究の対象とされてこなかった。それは、それが学者や政治家等の社会的に重要な立場にある人物でない限り、植民地統治に直接の影響がないと考えられてきたためである。中西美貴は、これに疑問を投げかけ、宗主国民衆の日常における植

民地理解を論じている。中西は、民衆と植民地の関係性を問うことは、すなわち「日常生活における統治性がどのようなことであるのかを問うこと」であり、その統治性が「帝国という制度を実践において支えるものであった」と指摘している（中西 2008: 105）。

しかし、実際に植民地を訪れたことのある日本人は、当然ながら一部に限られる。圧倒的多くの日本人にとっての植民地は、内地にしながら経験するものであり、その経験の場の一つが、内地で盛んに開催された博覧会であった。冒頭に引用した「台湾総督府は近年あらゆる機会を利用し『台湾』と云うものを内地に紹介することに努めている」が指す、総督府の内地への台湾紹介の最大のものが博覧会であった。

本稿では、まず、博覧会についてとりあげ、総督府が政治的な思惑によって行った博覧会での「台湾」の展示はどのようなものであったのかをみる。そして、銀座の台湾喫茶店の実態を明らかにしたうえで、博覧会と比較することで、「民衆的に内地人に紹介し宣伝する役」がどのようなものであったかを考察する。

1 博覧会と植民地の展示

1.1 帝国主義のディスプレイ

1851年に世界で最初の万国博覧会がロンドンで開催された。これが本格的な博覧会時代の幕開けであった。以降、欧米では大小多くの博覧会が開催された。日本は、1867年にパリ万国博覧会に参加したのを皮切りに、国外の博覧会に参加するようになり、次第に日本国内（含植民地）でも博覧会を開催するようになった。日本は、世界の万国博覧会で産業振興への博覧会の効用を学び、この経験をもとにして、各府県の物産開発を図り、殖産興業政策に資する場として1877年に第1回内国勸業博覧会を開催した。内国勸業博覧会は第5回まで開催され、明治の日本の産業技術の発達を促した。しかし20世紀にはいると、殖産興業の目的は薄れ、国威発揚や娯楽としての場に変容していった。

博覧会が世界で盛んに開催された19世紀から20世紀にかけては、帝国主義の時代であり、博覧会と帝国主義は強く結びついていた。このような結びつきは、1851年のロンドン万博の時にすでに現れており、その後の西欧の博覧会では、多くの植民地パビリオンが建てられ、ときには植民地の生身の人間が「展示」されることもあった。日本の博覧会でも同様に、次項で取り上げる第5回内国勸業博覧会以降、内地で開催された多くの博覧会において植民地からの出展があり、拓殖博覧会のような植民地そのものを対象にした博覧会も開催された。吉見俊哉は、日本の博覧会と帝国主義の関係について次のように分析している。「20世紀に入ると日本においても博覧会は、たんに新しい『文明』を垣間見、技術を習得していく場という以上のものになっていった。日清・日露戦争による植民地の獲得と資本主義の発展を背景に、日本の博覧会は、次第に『帝国』として自国の地位を植民地の『未開』との距離において確認する装置になっていったのである。」（吉見 2010: 222）

伊藤真実子は、近代の博覧会について先行研究から3側面に分類し、「第1に国家間の技術競争，第2に消費と娯楽，第3に帝国の支配を正当化する文化装置，ディスプレイである」とした（伊藤 2008:1）。これをふまえ、植民地パビリオンについて言及し、「エキゾチシズムを刺激する娯楽として万博で最も人気の高い施設であり，観客は会場内を周遊することで世界各地の周遊を疑似体験できた」としながら、「娯楽要素として不可欠なものであった」とし、植民地の「展示」に、第2の消費と娯楽，第3の帝国主義のディスプレイの両側面があったとしている（伊藤 2008:2, 96）。植民地の「展示」は、宗主国民に対して、植民地を体験する場を提供し、自国の優位と植民地化の正当性を示したのである。

1.2 第5回内国勸業博覧会と台湾の展示

1903年に大阪で開催された第5回内国勸業博覧会では、日清戦争の勝利によって帝国主義国家として歩み出した日本の姿を象徴する台湾館が初めて設置された。台湾館の設置について、『第五回内国勸業博覧会要覧上巻』には、以下のとおり書かれている。

台湾が我版図に編入せられて以来既に十年に垂んとし、而して尚ほ我国人にして台湾を知るものは甚だ少く国民国家的觀念未だ台湾を包括するに至らざるの憾あり。乃ち今回特に此館を設置し、彼地の製産物を一堂に蒐め、一は以て彼地の実情を知らしめ、一は以て台湾に対する国民の觀念を濃かならしめんとするに至たるなり。（第五回内国勸業博覧会要覧編纂所 1903: 264）

同要覧によれば、台湾館は「博覧会中の小博覧会」であり、「此館中に入れば乃ち小台湾中に移りたるものの如く」であった（第五回内国勸業博覧会要覧編纂所 1903: 268）。

第5回内国勸業博覧会における台湾の展示については、帝国主義の観点から多数の研究がなされている。例えば、呂紹理はこの展示が明治天皇の視察によって権威づけられたことを指摘している。台湾館の展示は、台湾統治が始まってからの8年間に行われた各種調査・統計・計測の成果の展示であり、各種写真・図表・模型・標本などによって、参観者は新領土台湾がどういうものかを知ることになった。その展示は総督府が選別したものであり、実際の台湾の姿とは矛盾する部分もあった。しかし、天皇をはじめとした皇族が台湾館で台湾を体験することは、その選別された台湾が正当であることの権威付けとなった。明治天皇は台湾を領土化してから台湾を訪問したことがなく、これが実質的に初めての台湾体験であった。これによって、台湾は天皇が続べる帝国の体系に組み込まれるという儀式的な意味合いもあったといえる（呂 2002）。また、松田京子は、台湾館などの異文化展示が果たした役割について考察している。博覧会の「場」においては、出品され展示されたものによって、その出品物を送り出した国全体の表象として「他者」認識が行われる。台湾については、日本内地に比べれば遅れているが、日本帝国の指導のもとで内地に近づく可能性のある植民地という認識が形成され、台湾に関する「他者」認識が作り上げられ

ていった (松田 2003)。

このように、博覧会で展示された台湾の姿は、総督府が選別したモノによって、政治的意図に基づいてつくられた姿であった。台湾を実際に訪れることができない日本人は、博覧会の場で、台湾の風俗を体系的に知り、植民地を体験したのである。

1.3 博覧会における台湾喫茶店

当時の報道によれば、第 5 回内国勸業博覧会で台湾館の人気を支えたのは併設の台湾喫茶店であったという。日本は台湾を植民地として獲得した後、国内外の博覧会で台湾館を開設しているが、当時最大の輸出商品であった台湾茶の販路拡大のため台湾喫茶店がしばしば併設され、参観者に台湾茶を飲んで休憩する場所を提供していた。この博覧会の台湾喫茶店は台北茶商公会もしくは日本商人が経営を行い、経費は基本的には経営する団体もしくは個人が負担したが、茶葉が主要な輸出品であったため総督府が援助することもあった。

第 5 回内国勸業博覧会の台湾喫茶店では、纏足の台湾人少女が給仕を行い、大変な人気を集めた。当時の新聞によれば、「非常の景気にて客は常に室内に溢るる許り、茶を酌み菓子をつむる台湾少女の服装より頭髮纏足まで内地人には珍しく之を觀んとて店前の軒下は人山を築き押し合ひひし合い往き来もならぬ有様」(『台湾日日新報』1903.4.8)であった。須藤瑞代は、喫茶店の纏足少女も「野蛮」さを伝える展示品的存在であったと指摘している (須藤 2003)。また、中西によれば、第 5 回内国勸業博覧会において、民衆が最も台湾を領土として感じたのは、台湾館内の物言わぬ展示物に対してではなく、台湾喫茶店や台湾料理店で、片言の日本語を操って給仕をする台湾の人々と出会ったときであった (中西 2008)。

博覧会の台湾喫茶店の盛況は、生身の人間の「展示」という問題と、博覧会における娯楽的要素の重要性を物語る (松田 2003: 60-1)。娯楽的要素としての飲食の提供は集客力が高く、その後の博覧会の台湾喫茶店でも、常に注目が集まった。

2 銀座の台湾喫茶店

2.1 創業から閉業まで

銀座の台湾喫茶店は、中澤安五郎⁽³⁾という人物が 1905 年に創業した。創業の経緯については、1922 年 12 月 6 日から 8 日にかけて『大阪朝日新聞』台湾版に連載された「銀座の烏龍茶」と題する記事から知ることができる。この記事によれば、中澤は、1904 年のアメリカ・セントルイス万国博覧会の台湾喫茶店の経営を引き受けたことをきっかけに、烏龍茶と関わりを持ったようである。セントルイス万国博覧会の事業報告書(『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告第二編』)によれば、博覧会内での台湾喫茶店を「茶商山口鉄之助外五名

ヨリ烏龍茶ノ眞味ヲ万国公衆ニ周知セシメ販路ヲ拡張スル目的」として設置した旨が書かれている。ここに、中澤の名前は見えないが、茶商山口鉄之助と共に、中澤も喫茶店運営に携わったと思われる。また、永井荷風の 1931 年 11 月 3 日の日記によれば、店の「主婦」（中澤の妻と思われる）は、1904 年のセントルイス万国博覧会の日本庭園内に設けられた茶業組合の売店で働いていた妓であった。

1905 年 12 月 28 日の銀座の台湾喫茶店の開店は、その 2 日前に『東京朝日新聞』で告知された。これによれば、「烏龍茶の真味を紹介して世の嗜好を誘致し以て台湾殖産の発展を謀らんとする」（『東京朝日新聞』1905.12.26.朝刊）という目的によって創業された。創業当初は銀座の竹川町の「すでに空き家同様になっていた勸工場」（石角 1934: 310）の「廊下のような細い建物で貧弱な」（『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.6）店であった。「ウーロンと称って呉れるものがなく『妙な家』だとか『変な茶を飲ます家』だ」と言われ、「台湾そのものすら内地の人々に熟く知られていない時代だから況して其処から産出される烏龍茶なんて聞いた事もない人が多い」（『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.6）状況で、あまり振るわなかった。しかし、翌 1906 年の 7 月 20 日付の『台湾日日新報』によれば、すでに 1 日 2, 300 の来客があるほど盛況となっており、創業から急速に人気が高まったことがわかる。また『大阪朝日新聞』台湾版の 1922 年 12 月 6 日付の記事によれば、同 1906 年 9 月から 12 月にかけて上野公園で開かれた日露戦争勝利記念五二共進会で、総督府が台湾館内の台湾喫茶店の経営を中澤に任せ、これが評判になり、銀座の店にも人が集まるようになったという。『東京朝日新聞』の 1907 年 8 月 19 日付朝刊では、台湾喫茶店が近々銀座の表通りであった「京橋区尾張町 2 丁目⁽⁴⁾」に移転することを報じている。

移転後の店舗には 2 階があった。帝国飛行協会が 2 階を利用して 30 人で総会を開いており、かなりの広さがあったようである（日本航空協会編 1956: 423）。また広津和郎が「2 階に特別室があった。10 銭か 20 銭の金を払うと、そのスペシャル・ルームで、2 時間でも 3 時間でも、本を読んだり、原稿を書いたりしていられた」（広津 1974: 165）と言っているように、この静かに過ごせる特別室は人気があったようである。

客層については、1922 年 12 月 7 日付の『大阪朝日新聞』台湾版では、次のように書かれている。

何しろ二十年近い年月であるからその間客筋の変遷も著るしく最初は黒田侯、堀田伯などを筆頭に華族連中の倶楽部のような観があったが中頃清峯太郎蔵原惟廓、松本君平などの代議士連それに本多精一博士、杉村楚人冠、松崎天民君などが定連であった事もあったが近頃では若い文士や美術家の出入するものが可成りありそれに新聞雑誌記者等が入交って熱い茶に咽喉を潤しながら文芸談や政治論に花を咲かす事も屢である⁽⁵⁾が、この永い間を通じて客の大部分を占めているのは何と云っても学生連中だ（『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.7）

また、1928 年に『台湾之茶業』に掲載された「ウーロン茶の愛用者となるまで (三)」という記事には、10 年前の学生時代を振り返り、当時は、銀座の台湾喫茶店が一番異彩を放っており、その異国情緒を恋人が好んでいたことが語られている。学生がデートでも訪れるような店であったようである。

安藤更生が「銀座で最初に女給を置いたカフェだ」「美しい女給が沢山出て随分盛なもの」(安藤 1931: 148) と述べているように、台湾喫茶店は女給を使った最初の店と認知されていた。「女給」とは、もともとウエイトレスとして給仕をする女性を意味していた。しかし、1923 年の関東大震災後には女給によるエロサービスを売りにする「カフェー」が急速に増える。文化人のサロンとして華やいでいた銀座は、関東大震災後に「カフェー」の全盛期に入っていく。しかし、松崎天民によれば、1927 年時点でも「依然としてここのお客は極めて静かに銀座気分を享樂しつつウーロン茶にのん^ゞどをうるほす」(松崎 1927: 31⁽⁶⁾) という様子で、風俗店化していく銀座のカフェー文化の中にあって、創業時の「頗る高尚且軽便にして紳士淑女の休憩に適する」(『東京朝日新聞』1905.12.26 朝刊) 雰囲気を残していることがうかがえる。

永井荷風の日記によれば、「台湾喫茶店の最繁昌せしは明治 43 年頃なるべし」(永井 1959: 110) とあり、最盛期は 1910 年頃である。その後 1923 年の関東大震災で被害を受けたため、関東震災以降は経営規模を縮小し、過去のような盛況振りはなくなってしまった。台湾喫茶店は、「地震後はうまく女給が集まらなかつたと見えて、しよつちう女給募集の貼紙が表に出て居た」(安藤 1931: 149) 状態で、時代にとりのこされていくのだった。しかし、震災後も 8 年ほどの間、変わらず銀座の表通りで営業は続けられていたようである。

閉業の正確な日時と経緯は不明であるが、永井荷風の日記によれば、台湾喫茶店の跡地に別の店舗ができたことが書かれている。また安藤更生の『銀座細見』の「昭和 5 年 12 月 20 日現在調査」には、銀座 6 丁目に「ウーロン」の記載があることから、1930 年の年末から 1931 年の 11 月までの間に閉業したものと思われる。

2.2 台湾喫茶店の姿

台湾喫茶店は、当時の人気店であっただけあって、多くの著名人が、ルポルタージュや日記にその様子を書き残している。本稿では、それらの記述から店の姿を明らかにしてみたい。

2.2.1 台湾らしさ

建物の外観や内装がわかる写真等は残念ながら見つかっていないが、「赤塗りで、台湾風を模したエレヴェション」(安藤 1931: 149) であり、「なんとなくハマの南京町にある支那風の構えを思わせる、銀座には異端な感じの店」(平野 1966: 87) というようになり「台湾らしさ⁽⁷⁾」を前面に打ち出した外観であったようである。店内には「支那絵の山水画」(『東京朝日新聞』1913.4.5) が掛けられていた。「よその店にはみられない、一種云うにい

われぬゆったりとした気分の東洋風な情緒がインテリに愛され、進歩的なひとびとをひいきにもっていた」(平野 1966: 87) という記述からは、台湾喫茶店の異国情緒のある雰囲気客に好まれていた様子がうかがえる。

看板メニューは、もちろん烏龍茶だった。烏龍茶には、台湾の特産であるバナナをつかった芭蕉煎餅の紅白二枚がついていた。店内では、他に、台湾産の果物類も販売していた。

また、「フタのついた茶わんごと茶をのませたり、パイをかたくしたようなあぶらこい菓子をだしたり、漢方薬のにおいのするノミモノをのませた(平野 1966: 87)」という記述もある。「フタのついた茶わん」は中国茶器の「蓋碗」を指すと思われる。漢方薬のにおいのするノミモノが何かはわからないが、「パイをかたくしたようなあぶらこい菓子」は月餅のような菓子であろうか。いずれにせよ、日本人にはなじみのない、中華飲食文化の提供があったことがわかる。

また、「画策に來た支那の革命党の一人のやうな気がした」(金子 1916: 90) や「支那人か台湾の貴族かと思はれるやうな顔つきをしたお客さん」(柳 1920: 138) というように、訪れる利用客の姿の中に、支那人や台湾人を見出しているのも興味深い。革命党の一人と思われる人物は、洋装をしており、支那人であるというのは、服装で判断したわけでも、話す言葉で判断したわけでもない。貴族と思われる人物も、顔つきからの判断である。この両者が本当に支那人もしくは台湾人であったかの真偽は不明であり、記述者の想像の域を出ていない記述だが、異国情緒のある店において、利用者達は自らその中に「台湾らしさ」を見出そうとしていたのかもしれない。

2.2.2 西洋らしさ

ここで注目したいのは、ここまで取り上げたような「台湾らしさ」以外の要素についてである。店内にはピアノがおかれ、烏龍茶のほかに、「仏蘭西流の料理」や「仏独英米露伊の酒数十種」(『東京朝日新聞』1913.4.5) が提供されていた。谷崎精二は「支那料理を余り好かない」(谷崎 1939: 112) と言っているにも関わらず、台湾喫茶店は好んで訪れていた。そもそも台湾喫茶店では中華料理を提供していないので当然ともいえるが、少なくとも台湾喫茶店が「支那料理」のジャンルとしては認識されていなかったことがわかる。

女給は「純白のしやれたエプロンの紐を、背中で大きな蝶々のやうに結んでゐた」(森田 1942: 195)。このエプロンは、店のきりもりをしていた「おかみさん」が人知れぬ苦心をして「前例のない日本娘に適したエプロン」(『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.8) として作ったものである。

当時店を訪れた人々の記述を見ると、「台湾喫茶店」ではなく、「ウーロン」「ウーロン亭」「ウーロンチー」と呼ばれていたようである。遅くとも 1922 年には「ウーロンチーとして銀座の一名物」(『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.6) となっていた。チーは tea のことであり、烏龍茶が、西洋的な tea として受け入れられていたということである。烏龍茶には、ミルクや砂糖もつけられていたようであり、紅茶のように飲まれていたことがわかる。

そもそも銀座という町自体が、ハイカラな町である。銀座は、1872 年の大火後、明治政府によって西洋化の象徴として煉瓦街として整備された。火災から 5 年後の 1877 年に街の建設は完成した。銀座の目抜き通りにはガス灯がともされ、銀座通りには煉瓦の建物が建ち並び、新しい日本を象徴する近代的な街、銀座が誕生した。西欧からの輸入商品や新しい商品を扱う商人たちが次々と店をひらき、銀座は西洋の事物が集まる街として発展していった。台湾喫茶店ができた明治 30 年代には、大衆の生活の西洋化が進んだこともあって、西洋商品を買求める多くの人々が銀座を訪れるようになっていた。とはいえ、繁華街としては依然として日本橋や浅草の方が人気があったようだが、台湾喫茶店は、東京随一のハイカラな街を創業の地に選んだのであった。

「台湾らしさ」だけでなく、西洋的な要素も取り入れた台湾喫茶店は、「文壇人を独占して最モダンを誇った」(今 1929: 106) 店であった。

2.3 総督府との関係

2.3.1 後藤新平の関与

創業に関しては、「後藤新平の乾分が、殆ど只みたいな値段でウーロン茶を譲り受けて宣伝に飲ませる店をひらいた」(南ほか 1988: 467)「台湾ウーロン喫茶店というのが台総督府長官後藤新平のお声掛けで出来た」(平野 1966: 87)「この店は台湾総督府長官後藤新平の台湾土産で、子分の中澤某が経営していた」(朝倉ほか 1970: 35)「経営者は後藤新平の民政党時代にその秘書をしていた人で、この人に金を出してやつて始めさせた」(珈琲会館文化部 1959: 217)、という後藤新平の関与を示す記述がある。後藤は総督府の民政長官⁽⁸⁾として、1898 年から 8 年間にわたって、植民地経営に携わった。その時の台湾総督は児玉源太郎で、後藤は、その補佐を務めた総督府ナンバーツーの人物である。児玉と後藤は、植民政策の中心を産業振興に置き、台湾の近代化の基礎を築いた。創業間もない頃には、後藤は実際に店を訪れている(松崎 1927: 158)。創業に後藤が関係していたということは、非常に興味深い。

2.3.2 総督府からの補助

創業の翌年 1906 年の「台湾日日新聞」の記事によると、銀座の台湾喫茶店に対しては、「台湾総督府よりは広告の爲め必要丈の製茶を無料にて仕送りつつある」(『台湾日日新報』1906. 7. 20 日刊)とある。創業の時から少なくとも 1922 年⁽⁹⁾まで、総督府から茶の製品が補助されている。総督府側の資料からも見てみよう。総督府殖産局附属製茶試験場の『明治 38 年度製茶試験場成績取調書』によれば、創業年の 1905 年 12 月 7 日に「東京烏龍茶喫茶店中澤安五郎」に対して烏龍茶が 200 斤(120kg) 300 円分が下付(無償譲渡)されている。この取調書によれば、総督府から茶葉の提供を受けた組織は、銀座の台湾喫茶店以外にもいくつかある。そのうち、無償提供は博覧会の台湾喫茶店用や、関係機関への寄

贈である。茶の輸出に携わっていた東京野沢組等は「払下」、すなわち有償譲渡である。銀座の台湾喫茶店は、博覧会の台湾喫茶店と同様に総督府から茶葉の無償提供を受けている。

また、1920 年 9 月 12 日付『台湾日日新報』によれば、アメリカの議員団が日本を訪れた際、総督府は中澤に命じて精選した優良な烏龍茶を貴衆両院歓迎会事務所経由で帝国ホテル内において贈呈させている。当時、台湾においては三井物産や野澤組がアメリカへの烏龍茶輸出を手掛けており、日本内においても三井物産系列の三越百貨店では烏龍茶が販売されていた。台湾茶輸出業に重要な企業であったこれらの 2 社にではなく、中澤に命じているあたりに、中澤と総督府とのつながりを見ることができるだろう。

2.3.3 日本統治時代の台湾茶業

ここで強調しておきたいのは、当時の台湾烏龍茶は海外への輸出商品であったということである。台湾茶業は清代末の開港を契機に勃興した産業であり、台湾における他の在来産業とは違って最初から輸出産業であった。茶の輸出が始まった 1870 年頃は砂糖が台湾の対外輸出の主流を占めていたが、1878 年には茶は砂糖の輸出額を上回り最大の輸出品目にまで急成長を遂げた。日本が台湾を領有した 1895 年時点において、台湾における最大の輸出商品は烏龍茶であった。

総督府の台湾産業振興の方針として最初に示された 1901 年の児島総督の訓示では、茶業については、「本品素と内国の消費に非ず、一に海外の需要を待つもの是を以て斯業の挽回を企て更に一進域を啓かん」（台湾総督府編 1941: 65）として、内地での消費は想定せず、海外への販路拡大に注力する姿勢が明確に示されている。その後も、台湾茶業政策は、海外への販路拡大が中心に据えられた⁽¹⁰⁾。

すでに述べた通り、銀座の台湾喫茶店の最盛期は 1910 年頃とされており、最盛期から経営を終了したと思われる 1931 年まで 20 年余りある。さらに、関東大震災による打撃は大きかったようで、震災後はすっかり寂れてしまった。しかし、そのような経営状態であっても、同じ銀座の表通りで、震災から 8 年ほど営業をつづけた。「主人夫人に競争心がないためか、はやってもはやらなくても超然として」いて「ウーロン茶一杯で、何時間腰かけていても、おかみさん（この人は奥さんと呼ばれてはいるが）は厭な顔一つしなかった」（広津 1974: 163-4）という証言からもわかるように、商売としての収益は重視していなかったようである。

『三府及近郊名所名物案内』では、銀座の台湾喫茶店の営業の様子について以下の通り紹介している。

其の営業振りは最も高尚で総て優雅と誠実を主とし我利一点張の商売人とは月鼈^{げつべつ}の差がある店主の語る処に拠れば商売は素より利を得なければならぬのではあるが自分は唯單に日本の人に新占領地の特産物たる烏龍茶の真味を紹介せんが為めに店を開いたのだから假令へ損しも決して悔まない（児島 1921: 87）

このことから、台湾喫茶店が、利益のためではなく、より公的な目的をもって総督府の支援を受けながら経営されていたものであると推察できる。

3 考察

以上、銀座の台湾喫茶店がどのような喫茶店であったかを明らかにした。この銀座の台湾喫茶店が「台湾を民衆的に内地人に紹介し宣伝する役」(『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.6) を担っていたという。では、銀座の台湾喫茶店はどのような意図で、またどのような台湾を伝えたのだろうか。

3.1 台湾イメージの刷新

日本が統治を始めて間もない頃の台湾は、内地の日本人にとっては、先住民族の首狩りの風習や、マラリア等の伝染病のイメージが強く、自ら進んで拓殖に行こうとするものは稀であった。先に引用した通り、台湾の統治を開始して 10 年近くが経っても「台湾を知るものは甚だ少く国民国家的観念未だ台湾を包括するに至らざる」(第五回内国勸業博覧会要覧編纂所 1903:264) 状態であった。これは台湾統治と開発に大きな問題であった。阿部純一郎によれば、1903 年の第 5 回内国勸業博覧会における台湾館の建設にあたって、当時民政長官であった後藤は、内地から植民地経営にとって必要な人材と資本を誘致する為に、日本国内の台湾に対する〈台湾＝異質・未開・野蛮〉という負のイメージの刷新を課題としていた(阿部 2011)。

また、第 5 回内国勸業博覧会の台湾からの出展について、1903 年 2 月 18 日付の『台湾日日新報』では、台湾イメージの刷新は、本島在住内地人の義務であるとし、その最も簡単な方法は、「あらゆる本島の物質を紹介すること」(『台湾日日新報』1903.2.18) である、と論じられている。

台湾喫茶店の創業にあたって、台湾イメージの刷新を課題と考えていた後藤の影響がどの程度あったかは定かではない。しかし、総督府が内地での烏龍茶消費の拡大を想定していないにも関わらず、公費を投入したことを考えれば、烏龍茶という嗜好品を媒介として、銀座の台湾喫茶店に台湾イメージの改善を行うことを少なからず期待していたものと考えられる。

3.2 脱中華化する「台湾」

岩間一弘は「日本の植民者たちは「台湾料理」を「支那料理」(中国料理)と区別することによって、中国文化から切り離して、日本帝国文化の一部に編入しようと企てていた」(岩間 2021:155) と指摘している。岩間によれば、第 5 回内国勸業博覧会に設置された「台

湾料理店」は、「台湾料理」を宣伝し、中国料理を初めて日本の「植民地料理」として認知させた（岩間 2021）。烏龍茶は、もともと中国福建省と広東省の特産品であり、清朝の時代に台湾に製法が伝えられた「中国茶」である。台湾で生産された烏龍茶は主に 1870 年代以降アメリカに輸出され、砂糖・樟脳にならんで、「清朝台湾」の重要輸出商品となり、日本が台湾を獲得した 1895 年には、台湾最大の輸出商品となっていた。中国茶であった烏龍茶も「台湾料理」と同じように、中国茶と区別し「台湾茶」とすることで、日本帝国文化に編入されたのである。

劉融によれば、第 5 回内国勸業博覧会において、台湾は、中国華南文化の一部として「新領土＝異国＝異民族」イメージで以て表現されたが、大正に入ると異国情緒は残しつつも、「新領土＝本国＝新しい物資源」イメージに次第に変化した。すなわち、台湾は、華南文化とのつながりを強調されることはなくなり、日本統治下で進歩し日本帝国の威光を示すものとして表現されるようになった（劉 2003）。当時、台湾は、中国産を凌駕して烏龍茶の世界的な生産地となっていた。日本にとって、烏龍茶はまさに劉がいうところの「新しい物資源」であった。また、銀座の台湾喫茶店では、西洋的な要素が取り入れられて、台湾が表象されている。これは、台湾を旧来の中華文明に属する地域ではなく、日本帝国の支配下において、近代化を遂げ、欧米にも受け入れられる茶文化を提供する地としての「台湾」を表現しているといえるだろう。

3.3 日常に滲み出た博覧会

銀座の台湾喫茶店は、竹川町の勸工場をその創業の場所としている。勸工場とは、明治期に数多く設立された店舗形式で、一つの建物の中に各種商店が連合して商品を陳列し販売した。1877 年の第 1 回内国勸業博覧会の会期終了後に、残品処分のため東京府が丸の内を開場したのが、始まりである。明治 20 年代から 30 年代にかけて隆盛を見たが、百貨店の誕生により衰退していった。吉見は、勸工場が少なくとも成立時は「常設化された博覧会空間」であり、「内国博が用意した民衆教化の戦略を持続的に発展させていく施設」として考えられていたと指摘している。博覧会と勸工場は同じ系譜にあり、歩きながら商品を見比べ、その中に「新しさ」を発見し、その「発見」自体も楽しむという共通のまなざしの経験を明治の民衆に提供していた（吉見 2010: 144-147）。台湾喫茶店が店を構えた時には、勸工場は「すでに空き家同様」となっており、衰退期に入っていた。それでも博覧会の系譜にある勸工場が創業の地であったことは、台湾喫茶店の博覧会との連続性を象徴している。

そもそも、銀座の台湾喫茶店の創業の契機は、セントルイス博覧会の台湾喫茶店にある。これは、銀座の台湾喫茶店が間違いなく博覧会の系譜にあることを表しているが、その性格について博覧会と比較して考察してみたい。

國雄行は、明治期の博覧会の性格を次の 7 つに分類した。

- ① コンクール。数多くの品物を一堂に集め、その優劣を競わせ、優れたモノには褒賞を与

える競技会で、技術改良を促し、優品政策を奨励する場。

② 商品見本市. 多数の出品者が数多くの出品を並べて購入希望者と売買契約を結ぶ場。ただし展示品として会場にとどめるため、売却は会期終了後に行われる。博覧会は世間から注目されるため、出品陳列には宣伝効果、販売促進効果がある。

③ 事物教育の場. 博覧会主催者が国民に教えたこと、伝えたいことを、展示品を活用して視角に訴え、教え導く場。その国がめざす未来像を提示する場でもある。

④ 見世物. 莫大な数の人々が博覧会を経済的に潤すため、主催者、観覧客の双方が認める見世物となった。

⑤ 祝祭. 会期が存在し、まだ世間に普及していないモノが並べられることから、時間的、空間的、物質的に見ても非日常的な性質を有している。

⑥ 戦争. 産業戦争であり、植民地を積極的に展示する戦争成果展覧会という国威発揚の場。

⑦ 平和. 国威発揚の場ではあるものの、文明国の祭典としての博覧会の基本は、表面的であつても、「平和」に行われる（國 2010: 206-11）。

こうしてみると、やはり銀座の台湾喫茶店は、博覧会に類似している。一飲食店であり、多種のモノが集まるわけではないため、①コンクールと②商品見本市の性質はやや弱い、それ以外は大体において合致する。

創業当時は、内地では台湾そのものすら知られていない時代であり、烏龍茶がほとんど認知されていない中、「烏龍茶の真味を紹介して世の嗜好を誘致し以て台湾殖産の発展を謀らんとする」（『東京朝日新聞』1905.12.26 朝刊）という目的のために創業された。また創業には、台湾イメージの改善を課題に考えていた後藤新平の意図が働いていると考えられることから、新領土「台湾」そのものを伝える役割もあつたことが想像される。いずれにせよ、植民地台湾の烏龍茶を通じて、台湾産業の「事物教育」がなされていたといえる。銀座の台湾喫茶店は、人気店でありながら、銀座には異端な感じと評価されており、「見世物」的でもあつた。博覧会のように期間限定ではないが、まだ日本では珍しい烏龍茶を扱っていた。その点でも「見世物」的であり、また非日常的な物質を取り扱う点で「祝祭」的である。ただ、銀座では一大名物となり、銀座の「日常」の一部となっていくことから、その非日常性は店の興隆に従って薄れていくことになる。店名には「台湾」が明示されており⁽¹¹⁾、いうまでもなく植民地台湾をテーマにした店舗であり、戦勝国というものの上で成り立っている点で「戦争」の性質を有するが、日清戦争や植民地支配を直接的に伝えるものではなく、客は「極めて静かに銀座気分を享樂しつつウーロン茶にのんどうるほす」様子で非常に「平和」的である。1912年の『ニコニコ』第17号に掲載された「フオルモサの珍客」という記事には、台湾の先住民達が銀座の台湾喫茶店を訪れた際に撮影された笑顔の集合写真が掲載されている。記事によれば、先住民たちは撮影者によって笑顔に誘導されたようではあるが、それは宗主国と植民地の「平和」な関係性が演出されているともいえる。仮に表面的であつたとしても、銀座の台湾喫茶店は「平和」な場であることが求められた。

博覧会に設置された台湾館と台湾喫茶店は、宗主国日本人としての台湾認識を植え付ける役割を担っていた。しかし、博覧会は期間限定の催事であり、あくまで「非日常」という枠から出ることはない。ところが、植民地台湾の存在は、「非日常」の中にとどまるものではなく、日本人にとっては、日常の一部となるべきものであった。その点からみれば、銀座の台湾喫茶店は、「日常に滲み出た博覧会」として、「台湾」そのものを日本に伝える「台湾の民衆的宣伝者」(『大阪朝日新聞』台湾版, 1922.12.6) であったのである。

おわりに

銀座の台湾喫茶店が創業された当時、内地では台湾も烏龍茶もまだ広くは知られておらず、店は「変な茶を飲ます」として怪しがられていた。しかし後に著名人が集う人気店にまで成長し、およそ 25 年にわたって銀座で台湾烏龍茶を提供し続けた。このことは、店の存在が「非日常」的なものから「日常」的なものに変容していったことを示している。そしてそれは、台湾という存在そのものが、内地の都市の日常に溶け込んでいく様子でもある。この店で表象される台湾の姿は、銀座という消費社会で求められ形成されたものであるともいえるが、その姿こそが一般民衆にとっての日常の中での台湾イメージの 1 つであったのである。

植民地の維持発展のためには、宗主国の民衆の、植民地に対する支配者としての優越感と親近感が必要である。しかし、この両感情は、時に相反するものであり、同時に喚起することは難しい。この点からみれば、博覧会が優越感を喚起するのに対して、銀座の台湾喫茶店が親近感を喚起するという相補的な役割を担っていたといえる。しかし、あくまで銀座の台湾喫茶店は、一地域にあった喫茶店であり、シンボリックな存在の域は出なかった。今後、他の事例の積み重ねが期待される。

中西は、民衆の日常における植民地理解を考えるにあたって、内地で開催された博覧会の新聞報道を分析した。中西は、博覧会報道には博覧会をみつめる際のまなざしの規範としての機能があるとし、「このまなざしの特質を問うことは、民衆にとって植民地が帝国内にどのような位置にあると考えられたのかを明らかにする作業であり、日常生活からは遠い植民地がどのように宗主国の社会の中に位置を占めていたのかを探る試みとなる。」(中西 2008: 107) と述べている。中西がいうように、「帝国」をディスプレイしようとした博覧会の成否は、当局のディスプレイを分析するだけでは不十分であり、民衆がどのようにその情報を受けとめたかも問われるべきである(中西 2008: 105)。この視点は重要ではあるが、そこには情報として与える側の意図が介入することには注意が必要である。

そもそも「非日常」のイベントである博覧会を対象として分析することで、はたして民衆の「日常」における植民地理解を十分に検討できるのだろうか。これまで宗主国の民衆の植民地理解については、政治的なイデオロギーが直接反映される教育や博覧会が主に考

察の対象となってきた。しかし、植民地が宗主国の「日常」にどのように存在していたかの視点、つまり日常生活に影響をもたらした点の考察も重要なのではないだろうか。本稿は、この視点から銀座の「日常」にあった台湾喫茶店をとりあげ、銀座の台湾喫茶店が、日常に滲み出た博覧会として、植民地に対する親近感を喚起し、民衆に台湾という新領土を浸透させる役割を担ったことを明らかにした。しかし、その受け手側の理解がどうであったかについては、今後の課題である。

また、吉見は、博覧会について、帝国主義のプロパガンダ装置、消費社会の広告装置、見世物としての娯楽装置の3つの側面からその変容を論じた（吉見 2010）。本稿では、銀座の台湾喫茶店について、帝国主義のプロパガンダ装置としての側面を中心に論じた。しかしながら、銀座の台湾喫茶店が、帝国主義のプロパガンダ装置としての機能を可能にしたのは、銀座という近代日本の消費や娯楽文化を語る上でも重要な街に存在したことが1つの要因であろう。これについては、残る2つの側面からの更なる分析が必要であり、今後の課題とする。

〔注〕

(1) 本稿では、引用に際して旧字体は新字体に改めた。

(2) 銀座の台湾喫茶店以外にも市井で営まれた台湾喫茶店の存在が確認できる。

1910年に日本で最初にできたルナパークの名前を冠する遊園地である浅草ルナパークには台湾喫茶店があり、「極めて下等な」「台湾式の厚化粧コテコテした」台湾女性が給仕をしていた（『台湾日日新報』1911.11.8 日刊）。しかし、ルナパークは開園後わずか8カ月で火災の為に閉園しており、台湾喫茶店も同時に閉店したと思われる。

1914年には千葉県銚子に中澤安五郎が銀座の台湾喫茶店の分店を開業させている。遊覧鉄道海瀬島駅付近にあったという。皇族の伏見宮が同店を訪れたようであるが、それ以外の詳細は不明である（『台湾日日新報』1915.3.3 日刊）。

1924年には、東京渋谷の全国物産共進会と、京都の万国博覧会参加五十年記念博覧会の台湾喫茶店が大成功を納めたことから、台北の茶商たちは、会期中だけではなく永続的な経営の重要性を認め、東京、大阪、京都の3都市において台湾喫茶店を設置する計画を立てている（『台湾日日新報』1924.4.23 日刊）。東京は、渋谷道玄坂百軒店に「三越のウーロン喫茶店」の存在が確認できる（『東京朝日新聞』1924.10.20 朝刊）。大正期の生活を描いた『放浪記』にも、渋谷の百軒店には「ウーロン茶をのませる店」（林 2014: 403）があったことが記載されている。京都は、『臺灣茶商公會沿革史』によると、「万国博覧会参加五十年記念博覧会」に設置された台湾喫茶店は、博覧会の終了後、新京極のローヤルカフェに常設喫茶店として設置され引き続き経営された。大阪の店については、その存在を管見の限り確認できていない。これらの喫茶店については、その後いつ頃まで経営されていたか等詳しい情報は不明である。

(3) 1911 年の『東京商工録』によれば、中澤は 1866 年 11 月生まれである。また、醤油醸造元ひげ田印と縁戚関係にあり、後に東洋協会評議員、鉄道協会評議員、京成電車遊園地顧問、総房協会常務理事などを務めた（松崎 1927: 158）

(4) 1930 年に銀座 6 丁目に改称された。

(5) 来店したことが確認できる著名人は、生田葵山、市川猿之助、宇野浩二、金子薫園、久米正雄、後藤新平、小山内薫、近藤経一、坂元雪鳥、佐々木茂索、高浜虚子、竹越與三郎、谷崎潤一郎、谷崎精二、徳田秋声、永井荷風、長田幹彦、広津和郎、正宗白鳥、松崎天民、森鷗外、森田たま、山崎楽堂、横山健堂、吉井勇（以上五十音順）等（横山 1913、金子 1916、松崎 1927、谷崎 1939、森田 1942、吉井 1943、広津 1974、『東京朝日新聞』1913.4.5 朝刊）。

(6) 1927 年に発行された松崎天民著の『銀座』は、書籍の後半（299 頁以降）に「銀ぶらガイド」と題された銀座の店舗の広告が掲載されており、ページ数はこの「銀ぶらガイド」のページ番号である。

(7) 台湾はいうまでもなく、中華文明の影響が色濃く刻まれた文化の中にあった。そのため、「台湾文化」と「支那文化」を切り分けることは難しい。「支那文化」から切り離され独立した「台湾文化」を見出すことは、すなわち日本領台湾イメージの確立になるが、台湾喫茶店で表現され、受け止められていたイメージは、台湾と支那が混ざり合っており、本稿ではそれらをまとめて「台湾らしさ」とした。

(8) 後藤新平の就任時の官名は「民政局長」。就任 3 ヶ月後に官制改革によって「民政長官」に改称。本稿では「民政長官」で統一した。

(9) 1922 年 12 月 6 日付の『大阪朝日新聞』台湾版の記事には次の通り書かれている。「私共が店を開きます時は台湾総督府から幾分宛でも補助を頂ける□□□たが詮議の結果本島以外□□□れが出来ないとの事でおじゃんになりました然し茶の製品は少し宛ですが今に至るまで年々頂いて居ります」（『大阪朝日新聞』台湾版、1922.12.6）（□は不鮮明なため判読不能の字）

(10) 1920 年代後半に台湾において良質な紅茶の生産が成功し、「日東紅茶」等の国産ブランド紅茶が登場する。1930 年代以降、台湾産紅茶は内地で多く消費された。いずれにせよ、台湾喫茶店が経営されていた頃の台湾産烏龍茶に関しては、常に海外への輸出を如何に維持拡大するかが総督府と台湾茶業界の関心であった。日本統治時代の台湾茶業については、河原林直人や谷ヶ城秀吉らの一連の研究に詳しい。

(11) 同年代に銀座にあった他の有名なカフェ（いずれも 1911 年創業）の名が「カフェー・プランタン」「カフェー・ライオン」「カフェー・パウリスタ」であったことを考えると、「台湾喫茶店」の名からして「非ハイカラのカフェ」（『東京朝日新聞』1911.9.6 朝刊）と言われたのも無理はない。ちなみに、当時、台湾ウーロン茶は欧米へは「Formosa Tea」として輸出されていた。台湾喫茶店店主の中澤が携わったセントルイス万博の台湾喫茶店も、公式ガイドブックでは「Formosa tea pavilion」となっている。この「フォルモサ」という「ハイカラ」な名称を中澤が知らなかったはずはない。それでも「台湾喫茶店」という名

称にしたのは、内地人に「台湾」という新領土の産物を扱う店であると、一目でわかるようにするためであろう。

[文献]

- 阿部純一郎, 2011, 「博覧会における『帝国の緊張』——第五回内国勸業博覧会 (1903) における内地観光事業と台湾館出展事業」『梶山女学園大学文化情報学部紀要』11: 1-25.
- 安藤更生, 1931, 『銀座細見』春陽堂.
- 朝倉治彦・安藤菊二・樋口秀雄・丸山信編, 1970, 『事物起源辞典 衣食住編』東京堂出版.
- 第五回内国勸業博覧会要覧編纂所, 1903, 『第五回内国勸業博覧会要覧上巻』.
- 銀座六丁目町会, 1983, 『銀座六丁目小史』.
- 林芙美子, 2014, 『放浪記』岩波書店.
- 林哲夫, 2020, 『喫茶店の時代——あとき こんな店があった』筑摩書房.
- 平野威馬雄, 1966, 『銀座の詩情 1』白川書院.
- 広津和郎, 1974, 『広津和郎全集第 13 巻』中央公論社.
- 筆者不明, 1912, 「フォルモサの珍客」『ニコニコ』17: 78.
- 筆者不明, 1928, 「ウーロン茶の愛用者となるまで (三)」『台湾之茶業』12(6): 18-24.
- 石角春之助, 1934, 『銀座解剖図』丸之内出版社.
- 伊藤真実子, 2008, 『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館.
- 岩間一弘, 2021, 『中国料理の世界史——美食のナショナリズムをこえて』慶應義塾大学出版会.
- 金子薫園, 1916, 『自然と愛』新潮社.
- 河原林直人, 2003, 『近代アジアと台湾——台湾茶業の歴史的展開』世界思想社.
- , 2005, 「台湾總督府の茶業関与——領台初期茶業を巡る認識と政策」『龍谷大学経済学論集』45(3): 1-25.
- , 2012, 「植民地台湾における業界団体——『台北茶商公会』の歴史的意義」『名古屋学院大学論集社会科学篇』49(2): 77-93.
- 児島新平, 1921, 『三府及近郊名所名物案内』日本名所案内社.
- 今和次郎, 1929, 『新版大東京案内』中央公論社.
- 國雄行, 2010, 『博覧会と明治の日本』吉川弘文館.
- 松田京子, 2003, 『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館.
- 松崎天民, 1927, 『銀座』銀ぶらガイド社.
- 南博・林喜代弘・小野常德編, 1988, 『近代庶民生活誌 享樂・性』三一書房.
- 森田たま, 1942, 『針線余事』中央公論社.
- 永井荷風, 1959, 『永井荷風日記 第三巻』東都書房.
- 中西美貴, 2008, 「宗主国民衆の日常における植民地理解——博覧会報道における台湾への

- まなざしに注目して』『ソシオロジ』 52(3): 105-121,232.
- 並木武雄編, 1911, 『東京商工録』 東洋出版協会.
- 日本航空協会編, 1956, 『日本航空史 明治・大正篇』 日本航空協会.
- 野口孝一, 2018, 『銀座カフェー興亡史』 平凡社.
- 農商務省, 1905, 『聖路易万国博覧会本邦参同事業報告第二編』.
- 小関孝子, 2021, 「銀座のカフェー——黎明期における『台湾喫茶店』と女給」『Atomi 観光コミュニティ学部紀要』 6: 59-68.
- 呂紹理, 2002, 「展示臺灣——1903 年大阪内國勸業博覧會臺灣館之研究」『臺灣史研究』 9(2): 103-144.
- 劉融, 2003, 「日治時期臺灣參展島外博覧會之研究」國立暨南國際大學碩士論文.
- 斎藤光, 2011, 「ジャンル『カフェー』の成立と普及(1)」『京都精華大学紀要』 39: 137-63.
- 須藤瑞代, 2003, 「消えていく李宝玉——1903 年『人類館』事件にみる新旧女性像の同時形成」『中国女性史研究』 12: 1-14.
- 台湾総督府編, 1941, 『詔敕・令旨・諭告・訓達類纂 (一)』.
- 台湾総督府殖産局, 1906, 『明治三十八年度製茶試験場成績取調書』.
- 谷崎精二, 1939, 『都市風景』 砂子屋書房.
- 陳天来編, 1938, 『臺灣茶商公會沿革史』 臺灣茶商公會.
- 谷ヶ城秀吉, 2004, 「1900 年代における台湾烏龍茶貿易経路の転換——台湾総督府の茶業政策と洋行の活動を中心に」『日本植民地研究』 16: 18-32.
- , 2010, 「20 世紀初頭における台湾-中国間経済関係の展開——烏龍茶輸出貿易の変容を事例に」『立教経済学研究』 64(1): 67-93.
- 柳銀之助, 1920, 「東京カフェ物語」『講談雑誌』 6(6): 130-145.
- 横山健堂, 1913, 『趣味と人物』 中央書院.
- 吉井勇, 1943, 『歌境心境』 湯川弘文社.
- 吉見俊哉, 2010, 『博覧会の政治学——まなざしの近代』 講談社.

[新聞記事]

- 台湾日日新報 1903 「博覧会瞥見記」 4 月 8 日日刊.
- 台湾日日新報 1903 「博覧会出品協会創設の必要奈何」 2 月 18 日日刊.
- 台湾日日新報 1906 「内地に於ける台湾茶」 7 月 20 日日刊.
- 台湾日日新報 1911 「僕より申上候」 11 月 8 日日刊.
- 台湾日日新報 1915 「銚子の台湾喫茶店」 3 月 3 日日刊.
- 台湾日日新報 1920 「米国議員団に烏龍茶贈呈 台湾総督府より」 9 月 12 日日刊.
- 台湾日日新報 1924 「台湾喫茶店三都市に計画」 4 月 23 日日刊.
- 東京朝日新聞 1905 「台湾喫茶店の開設」 12 月 26 日朝刊.

東京朝日新聞 1907「台湾喫茶店」8月19日朝刊.

東京朝日新聞 1913「銀座界隈」4月5日朝刊.

東京朝日新聞 1914「銚子だより」10月20日朝刊.

東京朝日新聞 1924「物産共進会」1月10日夕刊.

東京朝日新聞 1924「渋谷道玄坂百軒店 家庭衛生大展覧会」10月20日朝刊.

大阪朝日新聞 1922「銀座の烏龍茶（上）」12月6日（神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫）.

大阪朝日新聞 1922「銀座の烏龍茶（中）」12月7日（神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫）.

大阪朝日新聞 1922「銀座の烏龍茶（下）」12月8日（神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫）.

（かばしま いろは 奈良女子大学大学院人間文化総合科学研究科博士後期課程）

Taiwanese Tea House: A Study on the Formation of Colonial Image in an Ordinary Urban Space

KABASHIMA Iroha

Abstract

The purpose of this paper is to examine how the colony of "Taiwan" was communicated to the general public in the suzerain country Japan by focusing on Taiwanese tea house in Ginza.

Taiwan was the first colony acquired by Japan. However, very few Japanese had actually visited there. Therefore, most Japanese had no choice but to experience colonial Taiwan within Japan. In this situation, the Taiwan pavilions at the expositions were the places to understand the colony and be aware of the position as a suzerain citizen. Another example was a Taiwanese tea house in Ginza. A newspaper of the time praised it as conveying "Taiwan" to the Japanese people better than the Taiwan Governor-General's Office did.

The Taiwanese tea house had been operated in Ginza for about 25 years since 1905. Oolong tea, a specialty of Taiwan, was the signature menu item. It is said that Shinpei Goto, director of civil administration, Government-General was involved in the establishment of this tea house. Also the Governor-General's Office subsidized to the tea house. The tea house had a Chinese-style exterior and interior. However, the restaurant also had Western elements, for example a piano was settled and French foods were served.

The maintenance and development of a colony requires a sense of superiority and familiarity with the colony by the people of the suzerain state. However, these two feelings are sometimes contradictory and difficult to arouse at the same time. In this respect, expositions and the Taiwanese tea house in Ginza played complementary roles. The Taiwanese tea house in Ginza, as an exposition that seeped into ordinary urban space, played the role of arousing a sense of familiarity with the colony and of spreading the new territory of "Taiwan" among the people.

(Keywords: colonial image, Taiwanese tea house, ordinary urban space)